

子ども自身が自分や他者との折り合いをつける力

子どもの権利擁護委員 小林 央美



自分自身や他者との折り合いをつける力

子ども自身が自分をかけがえのない存在と自覚し、自らの権利を行使し、子どもがよりよい課題解決に向かうためには、「自分自身や他者との折り合いをつける力」が必要です。課題を解決する時に、自分自身を必要以上に責めたり卑下したりせず、自分自身も大切にしながら、他者の思いや願いも大事にして解決の道筋を探していくことを応援したいです。

社会情緒的能力とは

「自分自身や他者との折り合いをつける力」を社会情緒的能力と言っています。社会情緒的能力は、①目標を達成する力、②他者とかかわる力、③感情を調整する力のことを指します。もう少し具体的に言うと、①の目標を達成する力は、実行機能とも言われ、自制心や忍耐力のようなものです。例えば、勉強を頑張りたいと思う時に、漫画を読みたいとかテレビを見たいというようなことを我慢できる力ということになります。

②の他者とかかわる力は、向社会的行動とも言われ、思いやりや社交性のようなものになります。例えば、他者に対して自発的に親切な行いをする事等です。③の感情を調整する力は、自尊心や自己効力感のようなものです。

①～③までを見ていると、自分自身と他者との折り合いをつける力としてあまり関係がないのではないかと思うかもしれませんが、これらの力があいまって、自分自身の権利も大切にしながら、よりよい解決を導くことができるようです。



社会情緒的能力の二極化

社会情緒的能力は、幼児期から児童期に大きく発達すると言われ、個人差があります。発達に個人差があるのは自然なことですが、危惧されるのは、この力の個人差が極端になり二極化が進むのではないかということです。

しかし、社会情緒的能力を身に付けることができるように親を含めた周りの大人にできることがあるようです。今回は、そのことについてふれていきたいと思います。